



駒木教授(左)と菊池教授(愛知大学で)

# 学生

## 地域貢献事業

### 愛知大学地域政策学部

#### 駒木・菊池両教授に聞く

なかりながらさまざまな地域課題に取り組み活動として認知され、同大独自の事業として定着しつつある。

豊橋市に校舎を置く私立大学として長い間地域住民に親しまれてきた愛知大学。2011年に新設された地域政策学部は、大学、学生と地域のつながりを重視する新しい学科として注目されている。特に学科開設時から現在に至るまで続けられている学生地域貢献事業は、市民や地域団体、行政、企業などと有機的につ

生を支援している。

センターは学生らの交流の場だ。「事業に参加するためには、企画書を作り、プレゼンテーションを経て審査、承認される必要がある。スタート段階から学習が始まる」と駒木教授。活動したいという志のある学生が集まり、活動を通して自己実現する場として事業が機能しているという。「時にはテーマを与えることもあるが、基本は学生の発想を尊重する。今の学生は、地域に貢献したいという意識が高い。地域課題や国家課題が山積する時代にあって、その解決に取

り組みたいという意欲がある」。人と人、人と地域のつながりの重要性を認識し「一人ではない。手を取り合って課題に立ち向かおう」という「ある種の『お互いさま意識』を持っている。過疎化や人口減少が問題視される中、地域の中に若者が飛び込んでいくことで、地域の方に喜んでもらえる。それが学生にとつての充実感、自己肯定感、自信につながる。良いつながりができるあがっている」。

新型コロナウイルス禍で活動がしづらかったが、今年度、再び動き出した。「限られた時間の中で活動にどう

取り組むかが、今の学生に与えられた課題。運営委員制度を設け、サークル同士の横の連携強化も模索する。さまざまな困難はあるかもしれないが、新しい方向性、新しい活動を見いだしてほしい」と両教授は期待する。

「東京一極集中が行き詰まる中、持続可能な地域づくりのためには地域資源や地域人材を見つめ直すことが重要。東三河は商工農のバランスが取れた地域で、潜在的な力が強い。学生との連携の中でそれを発揮することができればおもいしろうい」とも話す。

学生と地域。つながりを醸成する中で、地域課題解決への新たな道筋が発見できるかもしれない。(大林恭子) 協力・愛知大学※次回からは学生団体を紹介しします。

# 新しい方向性・活動見いだして